

江吏部集試注 (十三)

木戸 裕子

(承前) (十二) は『鹿児島県立短期大学紀要』人文・社会科学篇第五十四号に掲載している。

凡例

- 一、底本は群書類従本を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。
- 一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。
- 一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

- 内閣文庫(旧浅草文庫)本―(内) 山口県立図書館本―(山)
陽明文庫本―(陽) 祐徳稲荷本―(祐)
静嘉堂文庫本―(静) 神宮文庫本―(神)
国会図書館本―(国) 無窮会図書館本―(無)
東大図書館(E45 656)本―(東A)
東大図書館(旧南葵文庫)本―(東B) 岡山大図書館本―(岡)
島原松平文庫本―(島) 東北大図書館本―(東北)
京大図書館本―(京) 多和文庫本―(多)
賀茂別雷文庫本―(賀) 名古屋市立鶴舞中央図書館本―(鶴)
本朝文粹(新日本古典文学大系)―(粹)
本朝麗藻(校本本朝麗藻)―(麗)
一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は底本の字体を尊重した。
- 煙・烟 花・華 叢・藜 窓・牕など。

- 一、割注など小書の部分は「」に入れて示した。
- 一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

付記 本稿を作成するにあたっては、東京大学史料編纂所データベース、北京大学全唐詩電子検索システムを利用させていただいた。学恩に感謝いたします。

※本稿では巻上第三十七番から三十九番までの詩及び詩序を取り扱う。

三十七 晚冬同賦池氷如対鏡〔以清為韻〕

- | | |
|---------|----------------------|
| 詩家任性不営々 | 詩家性に任せ営々たらず |
| 静対池氷若鏡清 | 静かに池氷に対へば鏡の清きが若し |
| 風是金鑪波上鑄 | 風は是れ金鑪波上に鑄 |
| 雪為瓊粉岸間瑩 | 雪は瓊粉と為りて岸間に瑩けり |
| 凝看蓮府千年影 | 凝看す蓮府千年の影 |
| 結借楊州百練名 | 結借す楊州百練の名 |
| 鶴望未諧宜照膽 | 鶴望するも今だ諧はず宜しく膽を照らすべし |
| 自慙霜鬢半頭生 | 自づから慙づ霜鬢の半ば頭に生ずることを |

【校異】

- 氷―水(陽、静、山、祐) 任―仕(東A) 性―ナシ(陽、祐、京)
ナシ〔任ノ横ニ脱ト傍書〕(山)―ナシ〔任ノ前後ニ補入印〕(神)
瑩―営〔ミセケチシテ瑩ト傍書〕(内A) 凝―疑(東A) 膽―瞻(島)

【押韻】

○○○×○○○◎	××○○××◎	下平声庚韻
○×○○○××	×○×○○×○◎	下平声庚韻
○×○○○××	××○○××◎	下平声庚韻
×○×○○××	×○○××○◎	下平声庚韻

【語釈】

◎池氷如対鏡Ⅱ詩題の出典は未詳。

◎詩家Ⅱ詩を業とする人。詩人。「秋愛冷吟春愛醉 詩家眷属酒家仙」

〈『白氏文集』一三八〇「重酬周判官」〉「詩家登逸品 釋氏悟真筌」

〈『全唐詩』卷三六二「酬樂天醉後狂吟十韻」劉禹錫〉

◎任性Ⅱ本来の性質を矯めず、自然に任せる。思いのままに振る舞う。

「不如來飲酒 任性醉騰騰」〈『白氏文集』二七六八「不如來飲酒」其六〉

其六〉

◎營々Ⅱあくせくするさま。「富貴故如此 營營何所求」〈『全唐詩』

卷一六一「古風」李白〉「寵辱憂歡不到情 任他朝市自營營」〈『白

氏文集』六二二「城東閑遊」〉「幽栖何事且營營」〈『本朝文粹』

卷一「山家秋歌」紀長谷雄〉

◎金鑪Ⅱ金の炉。金爐に同じ。「銀檣摧桑落 金爐上麗樵」〈『白氏文

集』二四四五「西樓喜雪命宴」〉

◎波上鑄Ⅱ白居易の新樂府「百鍊鏡」〈『白氏文集』一四六〉の「江

心波上舟中鑄」による表現。

◎瓊粉Ⅱ珠の粉。「瓊粉金膏磨瑩已 化為一片秋潭水」〈『白氏文集』

一四六「百鍊鏡」〉

◎凝看Ⅱじっと見つめる。凝視に同じ。「凝看出次雲 默聽語時鶴」〈

『全唐詩』卷六一〇「太湖詩」皮日休〉

◎蓮府Ⅱ大臣の屋敷。転じて大臣本人をいう。本試注三「暮秋左相府

東三条第守庚申同賦池水浮明月詩」の「蓮府」の項参照。「常在李門
員外職 久陪蓮府善根場」〈『江吏部集』卷上「夏夜同賦池台即事
教」〉「江吏部集」中の「蓮府」四例中、制作年代のはっきりした
二例は藤原道長を指しており、本詩の「蓮府」もおそらく道長をさ
すものと思われる。

◎楊州百鍊名Ⅱ白居易「百鍊鏡」による表現。「鏡成將獻蓬萊宮 楊州
長史手自封……乃知天子別有鏡 不是楊州百鍊鏡」〈『白氏文集』一
四六〉「百鍊影分山慘憺 千金価踊水潺湲」〈『本朝無題詩』卷三
「八月十五夜詩」大江匡房〉無題詩の例は、月を百鍊鏡に見立てたも
の。

◎鶴望Ⅱ鶴のように首を長く伸ばし、伸び上がってみる。切に願う。

「思漢之士、延頸鶴望」〈『蜀志』張飛伝〉「飄風暴雨可思惟 鶴望
巢門斂翅飛」〈『全唐詩』卷八六八「夢中辭」郭仁表〉「風聞在昔
紅顏日 鶴望如今白首辰」〈『本朝麗藻』下「夢中同謁白大保元相公」
高階積善〉

◎照膽Ⅱ心のうちを照らす。鏡が人の心を照らし出すという故事は唐
の太宗に仕えた魏徵の故事（三十六「七言夏夜陪左相府池亭守庚申
同賦池清知雨晴」魏徵之鏡」の語釈参照）や秦の始皇帝の鏡の故事
等がある。「高祖初入咸陽宮、周行庫府。金玉珍宝不可称言。……有
方鏡広四尺高五尺九寸表裏有明。人直來照之、影則倒見。以手捫心
而來、則見腸胃五臟、歷然無礙。人有疾病在內、則掩心而照、則知
病之所在。又女子有邪心、則膽張心動。秦始皇帝以照宮人、膽張心
動者、則殺之」〈『西京雜記』卷三〉「若道人心變 從渠照膽看」

〈『遊仙窟』「取揚州青銅鏡留與十娘、并贈詩」〉「閑談知照膽 莫
勸折燈花」〈『菅家文章』卷二「夏夜對 渤海客、同賦月華臨靜夜」〉
◎霜鬢Ⅱ霜が降りたように半ば白髪になった鬢「坐使驚霜鬢 撩亂已如
蓬」〈『全唐詩』卷一九〇「答重陽」韋應物〉「霜鬢已冷 懺五十九

非於伯玉之詞」〈『本朝文粹』卷十一「讀法華經廿八品和歌序」藤原有国〉

【通釈】

冬の終わりに皆で「池の水は鏡に向かっているかのよう」という題で詩を作る（清字を韻とする）

詩人は心のままにふるまいあくせくしたりしないもの

心静かに鏡のごとく澄んだ池の水を眺める

吹く風が池を鏡のように凍らせるのは（冷たいにも関わらず）

まさに鏡を鑄る金の炉

降る雪は磨き粉となって鏡（のごとき氷）をきらきらと輝かせる

池上の鏡をじっと見つめていると左大臣道長様の千歳のご繁栄の様子が見えてくる

この氷はあの唐帝に献ぜられた楊州百鍊の鏡にも優るとも劣らない

（この池水が百鍊鏡に歌われた天子の鏡であるならば）どうか、

私めに切に願っているながら未だかなわない望があることを、鏡

に照らしてわかつてほしいのです

叶わないまま年老いて、氷ならぬ霜が私の頭を半ば白くしていることを恥じるばかりなのですから

三十八 早夏観瀑布泉（栗田障子作十五首中其五）

閑望一条瀑布泉

閑に一条の瀑布泉を望めば

眼塵暗尽坐巖辺

眼の塵暗に尽きて巖辺に坐せり

穿雲倒瀉寒声堅

雲を穿ち倒しまに瀉げば寒声堅し

疑是銀河落自天

疑ふらくは是れ銀河の天より落つるか

【校異】

曝―瀑（陽、静、東A、祐、山、神、京、無） 瀑―曝（内A、島）
尽―蓋（ミセケチシテ盡ト傍書）（東A） 巖―岩（内A）

【押韻】

○○×○○×	×	○○××○○	上平声先韻
○○××○○×	×	○○○○××	上平声先韻

【語釈】

◎瀑布泉Ⅱ滝。本詩も「栗田障子作」の中の一詩である。詩題に具体的な地名は記さないが、熊本守雄「栗田障子詩絵と和歌と漢詩」

〈『惠慶集 校本と研究』〉によれば、『惠慶集』一八九「夏ぬのひきのたきみる人あり なつころもすゞみがてらにたちもきむちひろ

さらせるぬびきのたき」が本詩に対応する和歌であり、摂津の国の歌枕である布引の滝を詠じたものだという。

◎眼塵Ⅱ眼に移った俗塵。この一句『白氏文集』二八五二「秋池」の第二句、第三句「洗浪清風透水霜 水辺閑坐一繩牀 眼塵心垢見皆尽

不是秋池是道場」による。

◎穿雲Ⅱ雲を穿つ。滝が遙か雲の上から注ぐさま。この一句『菅家文草』卷三「観瀑布泉」による。「銀河倒瀉落長空 恰似霜紈颺晚風 清

澌寒声図不得 将聞二十八言中」

◎寒声Ⅱ寒さを感じさせる音。本朝文粹の例では雁の声や枯れ葉の音など秋の景物に使われている。ここは、初夏であっても冷たい滝の水の音。「見其残色 亦是五六株 学此寒声 不及二三日」〈『本朝文

粹』卷十「冬日於極楽寺禅房、同賦落葉声如雨」慶滋保胤〉「寒声乱櫓 忽伴漁舟之遊」〈『本朝文粹』卷十一「重陽日侍宴、同賦寒雁

識秋天」大江朝綱〉

◎疑是Ⅱこの一句、李白「望廬山瀑布其二」の第四句「飛流直下三千尺 疑是銀河九天落」による。

【通釈】

夏の初め滝を眺める（栗田障子作一五首中その五）

静かに一条の滝を眺めれば

巖のそばに座す我が眼からはいつの間にか世俗の塵が洗い流されている

滝は遙か雲の上から真つ逆様にそそぎ落ち冷たい水音を轟かす

まるで銀河が展から落ちてきたのかと思われるほどだ

三十九 七言夏日陪藤重相城北山莊同賦淡交唯對水詩一首（以清為韻

并序）

永延三年五月二十日

左親衛藤中郎將

右親衛藤中郎將

右賀部藤郎中左親衛重相

左武衛藤裨將

及朝士大夫夕拝侍中

都慮十有余人

会合于藤重相別業

于時

登臨山水左右琴書

其地之得土宜

華云実云莫不苞容

其主之得人聖

乃文乃武皆已欽慕

觀夫

永延三年五月二十日

左親衛藤中郎將

右親衛藤中郎將

右賀部藤郎中 左親衛重相

左武衛藤裨將

及び朝士大夫 夕拝侍中

都慮^{すべて} 十有余人

藤重相の別業に会合す

時に

山水に登臨し琴書を左右にす

其の地の土宜を得たるや

華と云ひ実と云ひ

苞容せざるは莫し

其の主の人聖を得たるや

乃ち文乃武 皆已に欽慕す

觀れば夫れ

遇境挾友對水定交

性淡不變

更沈思於在藻之鱗

心虜自親

兼結契於棲沙之鶴

彼金谷之春花

其芬芳恨当狂風以早落

庾樓之秋月

縱清朗嫌其遇浮雲以更昏

未若茲水

涉炎涼而不能渝

触沙石而不能汚焉

呼嗟

昔漢匡衡起微也

染儒業而早登三旌之崇

今江匡衡倦学也

味聖道而独泣四壁之暗

幸接衆賓之末

強記山水之遊云爾

一趣山家出洛城

淡交對水評交程

偶逢如旧知潭面

境に遇ひて友を挾び 水に對して交を定む

性淡にして變はらず

更に思ひを藻に在るの鱗に沈め

心虜^{こゝろ}しくして自づから親しみ

兼ねて契りを沙に棲むの鶴に結ぶ

彼の金谷の春花

其の芬芳 恨むらくは狂風に

当りて以て早く落ち

庾樓の秋月

縱ひ清朗たるも 其の浮雲に

遇ひて以て更に昏きを嫌ふ

未だ茲^{こゝ}の水の

炎涼を涉りて渝^かはる能はず

沙石に触れて汚すこと能はざ

るに若かず

呼嗟^{ああ}

昔漢の匡衡の微より起るや

儒業に染めて早く三旌の崇きに登り

今 江の匡衡の学に倦むや

聖道を味はひて独り四壁の暗

きに泣く

幸ひに衆賓の末に接し

強ひて山水の遊びを記すと云ふこと爾り

一たび山家を趣^{おも}ひて洛城を出づれば

淡交 水に對して交程を評す

偶たま逢へば旧の如し潭面を知り

相ひ見るも未だ曾て浪声を変ぜず
 貢禹冠を弾じて鏡に臨める思ひ
 王弘酒を送りて杯を把む情
 流れに挹みて何事ぞ独り危うく

水菽未だ酬いざれば所生に恥づ

◎藤垂相ニ 垂相は大納言の唐名。永延三年五月の時点で大納言または

権大納言だったの藤原氏は、朝光、道隆、済時、道兼の四人（公卿補任）による）。このうち、以前から匡衡らの参加した詩会を主催し

「秋夜陪右親衛員外巫相亭子守庚申、同賦秋情月露深」〔右親衛藤原相〕の語釈参照。(↓後藤昭雄「白河院の詩遊」) (『平安朝漢文学論』)

考』(一)

◎城北山莊＝城北は平安京の北。ここは済時の別業白河院を指すか。

◎淡交唯對水Ⅱ詩題の直接の出典は不明。典拠となるものは「君子之接如水、小人之接如醴。君子淡以成、小人甘以壞」へ『礼記』表記

篇》、及び「君子之交淡如水、小人之交甘如醴。君子淡以親、小人甘以絕」へ『莊子』外篇「山木」へ。

◎左親衛藤中郎將Ⅱ親衛は近衛府、中郎將は少將及び中將の唐名。永延三年五月に左近衛中将だったことがわかつてるのは藤原道頼

（永延二年三月）、左近衛少将は藤原道長（寛和二年十月）。また、権左中将としては藤原公任（永観元年十二月）がいる。（『公卿補

い。任』による)。詩会の参加者としては、道長か公任である可能性が高い。

下平聲庚韻

下平聲庚韻

○ ○ × × × ○ ◎ 下平聲庚韻

下平聲庚韻

【製作年月日】詩序本文から、永延三年五月二〇日。この年八月八日

「永祚元年」に改元された。

【語釈】

◎藤原相Ⅱ 相は大納言の唐名。永延三年五月の時点で大納言または

権大納言だったの藤原氏は、朝光、道隆、済時、道兼の四人（公卿

補任』による)。このうち、以前から匡衡らの参加した詩会を主催し

ており、白河院を別業としていた藤原済時である可能性が高い。七

「秋夜陪右親衛員外巫相亭子守庚申、同賦秋情月露深」

相」の語釈参照。(↓後藤昭雄「白河院の詩遊」(『平安朝漢文学論

考』
 〉
)

◎城北山莊||城北は平安京の北。ここは済時の別業白河院を指すか

◎淡交唯対水Ⅱ詩題の直接の出典は不明。典拠となるものは「君子之

接如水、小人之接如醴。君子淡以成、小人甘以壞」〔『礼記』表記〕

篇》、及び「君子之交淡如水、小人之交甘如醴。君子淡以親、小人

甘以絕」〔『莊子』外篇「山木」〕。

◎左親衛藤中郎將＝親衛は近衛府、中郎將は少將及び中將の唐名。永

延三年五月に左近衛中将だったことがわかっているのは藤原道頼

(永延二年三月)、左近衛少将は藤原道長(寛和二年十月)。また、

権左中将としては藤原公任（永観元年十二月）がいる。（『公卿補

任』による)。詩会の参加者としては、道長か公任である可能性が高

い

◎右親衛藤中郎将 永延三年五月に右近衛中将だったことがわかつているのは藤原齊信(永延三年三月)と藤原道綱(寛和二年十月)参加者の可能性としてはどちらもあり得る。

◎右賀部藤郎中 駕部は馬寮の唐名。駕部郎中は馬頭。該当者は未詳。

◎左親衛丞将 近衛中将及び少将の唐名。左親衛中郎将に同じ。

◎左武衛藤裨将 武衛は兵衛府の唐名。裨将は副将なので、兵衛佐の唐名となる。

◎朝士大夫 五位の官人「爰朝士大夫之思入風雲、志在花鳥者、濟濟而侍焉」(『本朝文粹』卷十一「初冬泛大井河詠紅葉蘆花和歌序」源道濟)

◎夕拝侍中 藏人の唐名。

◎都廬 すべて。唐代の俗語「于時 我党之英都廬四人」(『本朝麗藻』卷下「七言冬日於雲林院西洞同賦境静少人事」源道濟)

◎登臨山水 山に登り、水辺に臨み。二十四「七言。九月尽日同賦送秋筆硯中応製一首」の「登山」「臨水」の語釈参照。

◎土宜 土地に産する農作物。「弁土宜、土化之法」(『周礼』夏官土方氏)「母失其土宜」(『春秋左氏伝』文王六年)

◎華云実云 花も実も。

◎苞容 一つみこむ。包容に同じ。

◎人聖 聖人に同じ。すぐれた人。

◎欽慕 欲びしたう。「見賢思齊、已有先式。欽慕人跡、為日久矣」(『本朝文粹』卷五「為在納言建立獎学院状」高岳五常)

◎在藻之鱗 藻の中の魚。魚が藻の中でゆったりと泳いでいるように、君子の宴席で所を得て楽しむ様子。「魚在在藻 有頌其首 王在鎬京 豈樂飲酒」(『詩経』小雅「魚藻」)

◎棲沙之鶴 沙上の鶴。水辺に棲む鶴。「独立棲沙鶴 双飛照水堂」(『白氏文集』二六〇三「池上」)

◎金谷之春花 金谷は河南省洛陽県の谷の名。晋の石崇がここに別荘金谷園を造り、客を招いて詩宴を開いた。「有別廬、在河陽界金谷澗中。有清泉茂林、衆果竹柏、菓草之属。其為娛目飲心之物備矣。時征西大將軍祭酒王詡当還長安、余与衆賓共送。往澗中、昼夜遊宴。屢遷其坐、或登高臨下、或列坐水浜。時琴笙筑合載車中、道路並作、及任令与鼓吹遞奏。遂各賦詩以叙中懷、或不能者罰酒三斗」(『全晋文』卷三十三「金谷詩序」石崇)金谷詩序には春に宴したとは書いていないが、李白の「春夜宴桃李園序」に「如詩不成、罰依金谷酒数」とあり、石崇の金谷園での詩宴を引いているので、本詩序でも「金谷園之春花」と述べる。

◎狂風 勢いの激しい風。特に春の激しい風。春一番。「狂風第一吹狼藉 叱叱忿忿意不勝」(『菅家文草』卷一「翫梅華。各分一字」)

◎庾楼之秋月 庾楼は晋の庾亮が建てた楼。庾亮が武昌の南楼に幕僚らと共に登り月を愛でた故事が『世説新語』容止篇に載る。

◎浮雲 空に浮かぶ雲。「為問未曾告終始 被浮雲掩向西流」(『菅家後集』「問秋月」)

◎炎涼 暑いことと涼しいこと。気候。「此如小人面 変態随炎涼」(『白氏文集』一〇七「和松樹詩」)「炎涼有序知盈縮 表裏无私弁始終」(『菅家文草』卷一「賦得赤虹篇」)

◎漢匡衡之起微 微は貧しく賤しいこと。前漢の匡衡が、極貧の境遇から学問の力によって丞相にまで登ったこと。「蒙求」「匡衡鑿壁」の故事。「西京雜記云、匡衡字稚圭、東陽人也。好讀書。家貧无油燭。每穿隣壁、孔映光讀書。後、漢用為丞相」(『宮内庁書陵部蔵「蒙求上巻影鈔本」九「匡衡鑿壁」)「丞相匡衡者、東海人也。好讀書、從博士受詩。家貧、衡傭作以給食飲。才下、数射策不中、至九、乃中丙科。……補平原文学卒史。数年、郡不尊敬。御史徵之、以補百石属薦為郎、而補博士、拜為太子少傅、而事孝元帝。孝元好詩。……

而匡君為御史大夫。歲余、韋丞相死、匡君代為丞相、封樂安侯。」
『史記』『張丞相列傳』

◎三旌之崇 三旌は三公のこと。前漢では丞相、大司馬、御史大夫をいう。

◎四壁之暗 四壁は家の周囲の壁。転じて家の壁しか無いような貧しい状態。「漢書、卓文君、蜀郡臨邛富人卓王孫之女、琴善。既奔司馬相如与馳帰成都。家徒四壁立。文君久之不樂。曰、長卿盍帰如臨邛、從昆弟仮貸猶足為生。……」
〈宮内庁書陵部蔵『蒙求上巻影鈔本』二八〇「文君當鑪」〉「家徒四壁 恥文籍漸散」〈『本朝文粹』卷六「申弁宮左右衛門権佐大學頭等狀」大江匡衡〉

◎潭面 潭は深い淵。深い淵の面「湖光秋月兩相和 潭面無風鏡未磨」
〈『全唐詩』卷三六五「望洞庭」劉禹錫〉

◎貢禹 前漢の人。友人の王吉（王子陽）が先に任官した時、王吉が自分を引き立ててくれることを信じて冠の塵を払って待っていた。

『蒙求』『王貢彈冠』の故事。「王陽、少与貢禹為友。陽後任益州刺史。貢禹聞之、彈冠而一待。陽遂薦禹。成帝召、為太中大夫。世称曰、蕭朱結綬、王貢彈冠」
〈宮内庁書陵部蔵『蒙求上巻影鈔本』二九〇「王貢彈冠」〉

◎王弘 晋の陶淵明の友人。重陽の日に家に酒がなかった淵明に折良く酒を送った。『蒙求』『淵明把菊』の故事。「晋書、陶潜字淵明、好学嗜酒。九月九日無酒。於家辺菊藂中、摘菊盈把而坐、側望久之。有白衣人至、乃太守王弘送酒。即便飲既醉……」
〈真福寺宝生院蔵『蒙求下巻古鈔本』五二五「淵明把菊」〉

◎水菽未酬 水菽は水と薄い豆がゆ。粗末な食事。親に尽くす最低限の孝養。「夫患水菽之薄、干禄以求養者、是以恥禄親也。存誠以尽行、孝積而禄厚者、之以義養也」
〈『後漢書』「劉趙淳于江劉周趙列伝」〉

「孔子曰、啜菽飲水、尽其飲、斯之謂孝」
〈『礼記』檀弓下〉「老

母悠遺之命 官冷而水菽未酬」
『本朝文粹』卷六「申越前尾張等守狀」大江匡衡

【通釈】

夏の日、藤大納言様の城北山荘に陪し、皆で「淡き交わりは唯 水に対するのみ」という題で詩を作る。清字を韻とする。序を併せた。

永延三年五月二十日、左近衛藤中將、右近衛藤中將、藤右馬頭、左近衛少將、藤左兵衛佐、及び、殿上人や藏人たち合わせて十余人が藤大納言様の別荘に集った。

この時に当たり、みな山水の趣を存分に味わい、琴と書物を身邊に携え風雅を楽しんだ。

この城北の地は豊かで農作物に恵まれており、花も実もすべて穫れないものはない。

またこの山荘の主人はまさに聖人であり、文官にも武官にも皆から歎び慕われている。

見れば、われわれはこの境地にあつて友を選び、清らかな水辺で交友を固めている。

性質は水のように淡泊で変わることがない。だから藻の中で遊ぶ魚のようにゆったりと満たされた気持ちでこの詩宴の席にいる。

謙虚な心で自ずから親しくなる。水辺に棲む鶴のように友情の固い絆を結ぶのである。

あの、晋の石崇の金谷園の宴では春の花が美しく咲き誇っていただろうが、残念なことに強い風に吹かれればあつという間に散ってしまふ（交友も長続きしない）。

晋の庾亮が登った南楼では秋の月が清らかに明るく輝いていた

うが、浮雲が現れて月を隠し当たりが暗くなってしまうのが気に入らない(友情にも影が差してくる)。

寒暖の変化にも関わらず変わることなく、岸や水底の砂や石に触れ続けても汚れることもないこの地を流れる水にかなうものはないのだ。

ああ、昔前漢の匡衡は微賤の身の上から立って儒学を修めついには三公の高い位に付くことができた。今、私大江の匡衡は、学問に疲れ果て聖道を味わいながらも一人いつまでも貧しい我が家で泣いております。

幸いにも多くの賓客の末席に連なることができました。何とか今日の山水の遊びを記録したいと思う次第でございます。

ひたすら山家を求めて都を出れば

この地に集った者の交友は水に向かうがごときあつさりとした君子の付き合い

偶然会っただけでも(水面を見てその深さを知るように) 昔のままの深い心がわかるし

お互いに見交わせば(浪の音が以前と変わらないように) 昔と変わらぬ声だ

鏡のような水面を眺めていると、王子陽の友情を信じて冠の塵をはじいて出仕の準備をした貢禹の思いが伝わってくる(そのように我らも互いに引き立て合う仲だ)

盃を酌み交わせば、王弘が陶淵明を思つて酒を送った友情が思い出される

流れに臨んでどうして私は一人涙するのか

(引き立ててくれる人もなく) 未だわずかの孝養を尽くすこともできず親に対して恥じ入るばかりだから

(二〇〇四年十月一日受理)